

週言

今度の疎開は我々に色々教ふるものがあつたが、その中でも荷物運搬に現はれた帝都の小運送力は大きな示唆を與へる。強制疎開に伴ふ荷物の小運送は全く都民の自力で行はれたが、トラックあり、リヤカーあり、荷馬車あり、牛車あり、大八車あり、更に手押車、乳母車まで現はれて、至る處車と荷物とを以て充たされ、晝夜絡繹として絶えるところがないくらいであつた。

敵が本土に上陸し來る時、これを殲滅するのに最も大切なことの一つは補給であり、運輸である。敵の爆撃により交通網が壊されても、本土七千万國民の力を結集し、たちどころに萬全の補給が出来れば、皇軍が敵をみなごろしにし得ることは明らかである。

疎開に現はれた驚くべき小運送の力は、どちらかといへば自己保存の爲のものであつたが、若しこれを戦闘行爲に振向けた時、その成果は素晴らしいものであることがわかる。敵が上陸し來る時國民悉く兵となつて皇軍に協力し、その全力を發揮するならば、その偉力たるや期して待つべきものがある。

本土決戦の期は近づきつゝある。自己保存に向けしあのひたむきの努力以上のものを祖國の爲に捧げよ。然らば最後の勝利は我がものである。

血に染む沖繩の山河

大本營海軍報道部

南西諸島海面に 敵機動部隊跳梁

三月十八日拂曉、九州東南海面に姿を現はしたミツメル麾下の敵米第五十八機動部隊は、同日並びに翌十九日の兩日間に亘り、延二千五百機以上の陸上機を放つて、九州、四國、阪神の西部、日本各地に大規模な空襲を試み來つた。これに對しわが航空部隊は、十八日黎明より敵に對して先制攻撃を行ひ、果敢なる體當り戦法によつて、同十八日より二十一日までの四日間において、わが航空部隊は擊沈敵正規空母五隻、戦艦三隻、巡洋艦三隻、駆逐艦不詳二隻、陸隊百八十機以上といふ戦果を収めた。かくて敵機動部隊は、この甚大なる損害を

蒙つて一應南方海域に退去したが、その僅か二日後の二十三日に至るや、再びその巨艦を南西諸島の沖繩附近海上に現はしたのである。そして同二十三日以來、連日數百機の陸上機を繰出して南西諸島一帯に來襲すると共に、沖繩本島に對しても熾烈なる砲射撃を加へつゝあつたが、二十五日に至るや敵兵力の一部は遂に廣良間列島の渡嘉敷島、阿嘉島、座間味島の空島に上陸するに至つた。

こゝにおいて、所在のわが皇軍はこれを適際して警戒すると共に、わが航空部隊並びに水上部隊は特攻體當りを敢行して、二十三日より二十五日までに敵大型艦五隻を轟沈、別々に大型艦五隻を轟沈または大破せしめ、百五十機以上を撃破せしめ、更に二十六日より二十八日までの三日間において我が方の確認せる戦果のみにも、撃沈敵艦一隻、巡洋艦六隻、巡洋艦若しくは驅逐艦一隻、驅逐艦七隻、掃海艇一隻、擊破敵艦若しくは巡洋艦九隻、驅逐艦三隻、輸送船二隻といふ甚大なる損害を敵に與へた。

然しこれらの損害にも拘はらず、敵機動部隊は空母部隊の一群を南西諸島海面より九州東南海面に北上せしめ、一方マリヤナ基地よりのB29とも策應して大舉九州、四國の各要地に攻撃を加へ、沖繩作戦を牽制すると共に、南西諸島海面には空母二十隻内外を基幹とし、戦艦二十數隻、巡洋艦、驅逐艦、上陸用艦船等を合し、水上艦艇百數十隻の大兵力をもつて、虎視眈々として沖繩本島上陸の機會を狙ひつゝあつた。そして沖繩本島への砲射撃も、二十五、六日頃には一日平均五、